

身近な課題に取り組み生きる力を育む 地域で育むキャリア教育



最西端から最先端へ 小さな学校だからこそ 全員に出番がある

第23回 三崎高校(愛媛・県立)

取材・文／江森真矢子

総学の生徒執行委員から発展した「せんとん部」が先導し、イベント開催や半島を舞台とした映画の制作などダイナミックな活動を行っている。

総合的な学習の時間 テーマは「三崎おこし」

2015年度に総合的な学習の時間の再編を担当したのは、当時教務主任だった津田二幸先生。「私も卒業生ですが、早く都会に出て行きたいという気持ちがありました。また、自己肯定感が低くコミュニケーションが苦手な傾向があった生徒も、地域で活動すると学校では見えない成長を見せてくれることも感じていました。学力も特性も多様な生徒がいる本校で学びの個別最適化を図るには、学校の中だけでは限界があるのではないかと考え、地域活動に振り切ることになりました」と言う。

1年目、1年生は地域理解として調べ学習を行い、2年生は地域の課題解決プランを立て、3年生は課題解決のためのアクションに取り組んだ。生徒の希望に応じて「情報発信」「イベント企画・運営」「特産品開発」の3班に分かれて行った実践活動から生まれたのは、地元製

全校生徒100人に満たない学校で、外部のクリエーターや地域の人とともにダイナミックな地域活動を行う三崎高校。実は困難を抱えて入学する生徒も少なくありません。小規模だからこそ全員に出番があり、生徒たちは成長を実感しているようです。

菓店と開発した「みつちゃん大福」(左頁下図)。今も後輩がそのPR活動を引き継いでいる。2年目は2年生から「自分たちも考えるだけでなく何かしたい!」という声があがり、3年目には2、3年生が縦割りプランを立て実行するまでを行うことに。現在は、1年生は3学期から2、3年生の班にインターンとして参加するというスタイルになっている。

地域に出た生徒たちは、初年度から次々にアイデアを形にはじめた。健康寿命を115歳まで延ばすことを目標にした「みさこうたいそう115」の開発、海洋ゴミになっている漁業用のウキを使った「漂着物アートフェスティバル」の開発など(左頁下図)。自分たちができることを考え活動する生徒たちを大人が応援し、地域での高校の存在感は大きくなっていった。

学校内外、地域内外との 交流で殻を破ることができた

同校には寮があり、地域外からも生徒が入学している。寮生のひとりでせんとん部2年生の酒井楓斗さんは中学校にほとんど行かず、勉強にも人間関係にも不安があったが、少人数のこ

こでなら頑張れそうだと入学した。「寮だけでなく、学校全体が家族みたい。勉強はちょっとしんどいけど今は普通に学校に行けてるし、学校外の人と関わる機会が多くて普通に人と喋ってる。成長したと思います」。酒井さんは昨夏、小誌でレポートした全国小規模校サミット※(山形県立小国高校主催)に参加していたが、プレゼンで笑いを取る堂々とした姿が印象的だった。

同校では学校の近隣地域だけでなく、他地域の高校生や大学生、大人との交流も積極的に仕掛けている。きっかけは2016年、愛媛県が開催した高校生向けプロジェクトマネジメント研修。三崎おこし1期生、当時2年生の2人が参加し刺激を受けて「もっと知って! M I S A K I」プロジェクトを立案した。三崎にもっとたくさんの人に来てもらいたい、という願いが漂着物アートフェスティバルを生み、活動の中心となるせんとん部が誕生。さらに他校生や大学生を招いての「せんとんミーンティング」(左頁下図)を実現させた。校外との交流によって「大人も同じように頑張っている」「自分たちのやっていることも実はけっこうスゴイ!」といった

School Data

1951年創立/普通科/生徒数108人(男子59人、女子49人)/進路状況大学短大11人、専門学校8人、就職10人、その他1人/地域との協働による高等学校教育改革推進事業研究指定校

※ Vol.429 「生徒と教員と地域の信頼関係が互いを成長させた全国小規模校サミット」で紹介



(写真左から)津田一幸先生(地域協働課課長)、酒井楓斗さん、尾澤里咲さん、楠彩菜さん、河野雄太先生(地域協働課、せんたん部顧問)

ことに気づき、活動への意欲が生まれた。今では総学での活動成果をもって「コンテ」ストなどに参加し、賞を得る生徒も少なくない。酒井さんは「活動の発表のため行く機会のない所に行けて嬉しい、自分の殻を破るのは大変だけど悔いのない生活を送っている」と言う。

先生が私たちを見て 全力で応援してくれる

同じくせんたん部部長の尾澤里咲さんも地域外から入学し、殻を破ったひとりだ。「先輩たちと一緒に活動しながら発想力や発言力がついたと感じています。うちは先生も生徒も仲が良く、先生たちは私たちのことをよく見てくれています。暗い顔をしていたら声をかけてくれて、話せば不安がなくなり、それと、チャンスがそこへんにたくさんあつて、掴んだら先生は全力で応援してくれる。私はアイルランドへの短期留学

を掴みました」と言う。

入学前は地域活動に興味はなかったが、今では「町に名前や顔を知っていて、挨拶をしてくれる人がいます。一対一の関係を築くことができているのが嬉しい」。そして地域の伝統工芸、裂織りを守り、若者に広めたいと思うようになった。「地域活性に興味があるけれど、地域系学部ではなく、斜めから。経済学部や工学部で学んで、三崎に仕事をつくれるようになりたい」と考えているそうだ。

小さな学校だから 全員に活躍の場がある

一方、楠彩菜さんは地元・伊方町が大好きで、町をもっと知りたい、元気にしたい、と入学した。今年2月に開催した「せんたん劇場」(下図)では、裏方を担当。イベント班、カフェ班、商品開発班、ツアー班、アート班、情報・防災班、せんたん部に分かれて活動していた各班が学校から少し離れた地区で一緒にさまざまな企画を実践するイベント。初めての全校生徒による催しだ。いつも表に立って活動するせんたん部は、各班や地域との調整に動き、結果は200人の参加者で大盛況。

「みさこうでは普通の学校ではできないことができます。イベントが終わるとメールをくれる郷土館の方がいたり、町長さんと話すこともあつて、自分が地域に貢

献できている実感があります」という楠さんは、教員になる夢を抱いている。「小学校の頃から地元を好きになってもらって、伊方町を盛り上げたいんです。うちの学校は一人ひとりが輝ける学校」と言っているんですけど、自分がこうなりたい、ということを生徒たちが本当になれるように導いてくれる。小さい学校だからこそその良さだと思います。

三崎高校の良さを感じているのは生徒だけではない。「これだけの活動ができる学校はなかなかない」と言うのは河野雄太先生。地域活動の盛んな学校で働きたいと同校を希望した河野先生は、教員になる前にNPO法人や海外で働いていた経験もある。「今後、求められるのは多様な人と関わったり、プロジェクトに取り組んだ経験のある人、本校の取組はその意味でも、最先端です。小さな学校だから全員に順番があり、自分の置かれた場所で咲くことができる生徒が育っていると思います」。

同校の志願者増の背景には、地元伊方町からの財政的支援もある。しかし、寮や公営塾、交通費補助があるだけでは志願者は集まらない。ここで学びたい、そう思わせるのは充実した生活を送り、この学校にきて良かったと思っている在校生・卒業生の姿、そしてそんな学校をつくっている教員たちの在り方なのだろう。

生徒の活動例

●みっちゃん大福

地元の特産の柑橘類を白餡で包んだ大福で、後輩が引き継ぎ販売やPRを行っている。初年度から商品化され、2019年には全国の地方新聞社が主催する「こんなのあるんだ大賞」で3万6千点の商品の中から大賞に選ばれた。製作する田村菓子舗は、売り上げの10%をみっちゃん大福基金として三崎おこしの活動資金として寄付している。



●せんたんミーティング～先端に出会う。先端で語る。先端であそぶ。先端で叫ぶ。～

せんたん部の活動をするなかで「もっと多くの人の活動を知りたい、つながりたい」という気持ちから開催。2日間にわたり、活動事例発表や交流会、生徒がガイドするまち歩き、参加メンバーによる宣言を行う。校内での講演をきっかけに関わるようになったプロジェクトデザイナー、濱田竜也氏の協力を得て開催している。

●漂着物アートフェスティバル

海洋ゴミになってしまっている、漁業用の浮き(ブイ)を利活

用する「ブイアート」活動を知り、海岸での回収から始めたイベント。廃校になった元中学校校舎を使い、プランター作りや、ブイを使って体を動かす「ブイリンピック」などの企画を実施。



●みさこうたいそう115

2017年度に健康班として活動していた生徒たちが、愛媛大学社会共創学部の学生の協力を得て開発した体操。高齢者の健康寿命を115歳まで延ばすことを目標としている。高齢者福祉施設や保育園での普及活動に加え、イベントで披露している。



●映画「せんたんビギンズ」

せんたん部が中心となり、映像作家や美術作家の協力を得て制作した60分の青春ムービー。せんたん部発足の経緯をモチーフに、即興的にセリフやストーリーを組み立てなが



ら作りあげられた。生徒は撮影スタッフや出演者として活躍。地元住民も出演した映画は、初回の町内上映は満席で急遽増席。せんたん劇場でも上映された。

●せんたん劇場

学校から少し離れた大久地区を一つの劇場に見立て、三崎高校生と住民が交流を深めるイベント。2020年2月、2日間にわたって行われた。「集落であらう」「集落をあそぶ」「集落をかたる」「集落であそぶ」を4本柱にしたプログラム。地元へ伝わる踊りの披露、まち歩きガイドツアー、防災についてのトークイベントなど、全校生徒が役割をもって開催した。



●その他

みさこうマルシェの開催 / ブイアートワークショップの開催 / 「あいおる」「裂織りリッシュ」などの商品開発 / 地域防災研究 / 各種地域イベントへの参加 / 全国各地での実践報告やカンファレンスへの参加 など